

名作再読、拾い読み (19)

『ガラスの動物園』 ("The glass menagerie") (1)

小澤 文彦

テネシー・ウィリアムズ (Tennessee Williams, 1911-1983) は、第二次世界大戦直後ブロードウェイに現れて、アーサー・ミラーと共に戦後のアメリカ演劇界を代表した劇作家です。ミシシッピ州コロンバス生まれで、本名はトマス・ラニアー・ウィリアムズ。通称はトムでした。

ミズーリ大学、ワシントン大学、アイオワ州立大学で学び、靴会社や舞台関係の様々な仕事に従事した後で、『ガラスの動物園』(1944)で成功を取め、『欲望という名の電車』(1947)と『やけたトタン屋根の上の猫』(1955)ではピューリッツァー賞を受賞しました。他に、『夏と煙』(1948)、『去年の夏、突然に』(1958)、『青春の甘い鳥』(1959)、『イグアナの夜』(1961)などがありますが、作品の殆どがアメリカ深南部を舞台としてデカダンスと性の葛藤に苦しむ人々を扱う内容となっています。小説では『ストーン夫人のローマの春』(1950)がありますが、それ以外に短編小説、詩、随筆があり、1975年には自伝『回想録』を出版しています。

父親は、電話会社に勤めていましたが牧師の娘のエドウィナと結婚してから転職して靴のセールスマンになり、家には殆ど居ませんでした。その為、家族は母方の祖父の牧師館で生活したのですが、この南部での幼年時代がトムに一生を左右する大きな影響を与えています。また、トムは5歳の時に罹ったジフテリアの後遺症で足が一年間不自由だったので、内気で孤独な性格はこの時期に形成されたと言われています。

1928年に父親が靴会社の販売部長に抜擢され、一家は南部の小さな町から中西部の大都会セント・ルイスに引っ越しました。セント・ルイスで彼は南部訛をからかわれ、「テネシー」という仇名を付けられましたが、これが彼のペンネームの由来となっています。一緒に暮らすようになった父親は、酒を飲んで暴れる暴君で、母親とは絶えず喧嘩をし、姉のローズは被害妄想から精神病院へ入退院を繰り返すようになりました。トムもミズーリ大学を2年で中退させられ、靴会社に無理やり勤めさせられましたが、この苦しい時期にも彼は創作活動を続けました。彼の戯曲『カイロ、上海、ボンベイ』がメンフィ

スで上演されてから、1936年にワシントン大学に編入学し、その翌年アイオワ州立大学に移り次々と戯曲を書いていきます。1937年、父親は症状が悪化したローズにロボットミー手術を受けさせ、以後、ローズは廃人同様となりました。その7年後に書かれたのが『ガラスの動物園』で、この作品には姉のローズに対する痛切な思いが籠められています。

追憶劇として書かれた『ガラスの動物園』は、1930年代のアメリカ経済が不安定な時代を背景とし、主人公トムの回想するナレーションで話が展開していきます。

登場人物は、典型的な南部婦人のアマンダと自閉症気味の娘ローラ、その弟トム、彼の会社の同僚ジムの4人です。

若い時は農園主の息子達によくもてて、一時は14人ものボーイフレンドから求婚されたのだけれども、電話会社に勤めていた若者がハンサムだったためにその人と結婚したということをし、何度も繰り返して話す社交的な母親アマンダ。夫は大分前に家を飛び出して行って、メキシコから「ハロー、グッバイ!」という2語だけ書いた絵葉書を寄越したきり、消息不明となっています。セント・ルイスの安アパートに住み、家計は苦しく、靴会社の倉庫で働くトムの給料を頼りに貧しい生活をしています。

父親不在で母親が頑張っており、非常に内向的で家に引き籠もっている娘と自分の職場に満足せず家を出て自由に生きることを夢見ている文学青年の息子を抱えている家庭といった設定は、現代日本でも「引き籠もり」「ニート」というよく似た状況が見られるので、この劇をより一層身近なものに感じさせてくれます。

(次号へ続く)

参考文献

1. Tennessee Williams "The glass menagerie" in "Four plays" (Secker & Warburg, 1968)
2. T.ウィリアムズ著、小田島雄志訳『ガラスの動物園』(新潮社、1988)

おざわ ふみひこ (情報サービス課)